

非決定性有限 状態機械

Non-
deterministic
Finite
Automaton

たった一人では浅打あきうちの長さにも満たず、二人合わせても部屋天井まで届かない、喜助にも夜一にもそんな小さな頃があった。

その当時、四楓院家のご令嬢と連れだって歩けるものといえば一人の少年と一匹の黒猫で、逆に言えば、どんな大人でも彼女と並び立てる者は居なかった。

誰かが一緒に歩こうとすれば、姫君は子供にそぐわぬ不敵な笑みを浮かべて

「鬼事か？」と囁く。

と、次の瞬間には天性の逃げ足でかき消えていた。慌てて後を追っても、大人ではくぐり抜けられぬ縁側も壁の穴も、幼女の背丈ではこの上ない逃げ道だった。

彼女について行けるのは、幼なじみの浦原喜助と夜一が拾ってきた一匹の黒猫だった。喜助はへらへら笑いながら息一つ乱さずに三步後ろを付き従ったし、猫は猫で鼻を効かせて回り道をする。夜一より小さく軽い猫の身ならば、いかな隙間でも道となった。

気むずかしい姫君がへそを曲げずに付き合えるのもこの

一人と一匹だけだった。喜助は張り付いたような笑顔を浮かべて、彼女の言うことならどんなことでも聞いた。不気味な子供だと周囲は噂した。だが彼としては本心からの笑みを浮かべているつもりなのだった。

何をしても嘘臭くなる。それは普通なら損なことだったが、夜一はいつか、本心の振りをして嘘を言われるより、初めから嘘らしく振る舞われた方がよほど心安らぐのだ、というようなことを彼に告げた。無論、小さな子供の言うことだ。もつとたどたどしく拙い言葉ではあった。だが、喜助の胸の内に光る小さな種火として、その気持ちは残った。

猫はもつと単純だった。都合が悪くなると聞こえないふりをして逃げ、また忘れたころに戻ってきた。それが出来るのは猫が一番の年上であつたからに相違ない。猫は常に三步先を見た。姫君のかんしゃくが爆ぜる三秒前に、戦場から抜け出し、泣き止む一瞬前に来て、その涙をなめとった。

そう、猫は年上だった。おとなだった。彼らと同じ頃に生まれたのに、老猫と言っている風格と分別を身につけていた。そのことが時として喜助にはうらやましくもあり、ね

たましくもあつた。猫に嫉妬するなど、本当なら馬鹿な話だ。

だが、幼い魂には猫と人の区別など無意味だった。せいぜい尻尾の有無ぐらいの区別だ。それとて、尻尾がある方が何かと良いに決まっている。少なくとも喜助はそう思つた。

猫には名が無かつた。名を付ける事に意味はなかつた。喜助にとって、四楓院家のご令嬢こそ区別する意味があつた。あなた、と子供らしからぬ優しい呼称で彼女を呼んだ。夜一もそれで満足であつた。喜助は猫のことをただ、猫とだけ言つた。それで通じた。

夜一もまた名を付けなかつた。喜助のことはただ、おい、とだけ呼び、猫のことは人語に直せぬ何か鳴き声の如きを以てその呼称とした。おそらくは猫語であろう。

喜助には分からぬ言葉で夜一と猫が会話していることがあると、彼はそのわざとらしい笑みを止めて、じつと黙つて待つた。きやあきやあと笑いながら、何かを楽しそうに猫と語っているその少女の表情を見ていると、ひどく安心した。それをもたらすのが自分自身ではなくても、その笑み

れていき、それでいて真夏のように暑い陽射しがちぐはぐで、不快だつたのを喜助は覚えている。こんな日は日射病にならぬようにと帽子を被つて出かけるのが常であつた。誰に教えられたのかは分からないが、妙に気の付く子供だつた。自分の分と彼女の分と、二人分の帽子を持って出かけようとした矢先、異変に気が付いた。

屋敷中の大人たちが一つの部屋に集つてざわめいていた。一枚の紙切れを中心にして、恐れおののき、慌てていた。普段なら気にすることは無かつた。大人はどうでも良いことで騒ぐ。だが、姫君の名を囁かれては、廊下で聞き耳を立てずにはいられなかつた。まだ幼い喜助には分かる言葉は限られていた。

猫、黒猫、危険、火薬、腹の中、脅迫状、だから野良は、飼う、反対、いままらいます、調べる、どうやって？

切ればいい、夜一、悲しむ、
そこまで聞けば十分だつた。何をすればいいのかは分かっていた。喜助は急いでその場から離れた。

喜助の手先は器用で、組み上がったものは何でも元の通

を眺めているだけで満足した。かすかに胸の内にとらつく嫉妬の種火は煙だけ残して、燃え上がることはなかつた。

そふた、彼は満足していたのだ。

知らぬ家の縁側で、二人と一匹寝ころんで目を閉じている時、近所で一番高い木の上で雲に届こうとして手を伸ばした時、猫だけが迎えに来て何かと思つて走れば姫君は木の上で熟睡中だつた時、雨上がりの泥だまりで互いの頬や背中に家紋を描きあつて遊んだ時、猫を風呂に入れてようとしてこつぴどく引つかかれてそれでも猫を強引に放り込んだら今度は姫君の方が泣き出した時、眠りかけた姫君の頬と猫の肉球を触り比べて違つた柔らかさを感じた時。

木を削つて作つた鳥が空を自由に飛んだ時、それを笑いながら皆で追いかけた時。誤つて踏みつけて壊れても、組み上げてつなぎ合わせれば元の通りに動いた。彼女は、喜んでくれた。それを眺めていた時。

それだけで良かった。

それ以上のことなど望んではいなかったのに。

ある日のことだつた。北風が強く、雲が逃げるように流りに動いた。自分はなんでも元の通りに戻すことが出来るのだと思つていた。夜一が散らかした玩具だつて、意識なくとも何がどこにあつたかきちんと記憶して、丁寧に片づけることが出来た。鍵の掛けられた金庫を箱ごと分解して、中身を取り出して元通りに組み立てたことだつてあつた。

だから、いつもの通りそうすればいいだけだと思つた。何も難しいことは無いと思つた。

すぐに彼女は見つかつた。良く一緒に遊ぶ空き家の庭だつた。少し前に追放された死神が住んでいたところだつた。喜助の膝まで伸びた草に埋もれるように、彼女はあぐらをかいて座つていた。その黒髪が日につやつやと虹色に光っているのが見えた。

「ねえ、あなた」

何でもないことのように、喜助は後ろから夜一へ話し掛けた。

「んっ」

褐色の肌をした少女は、横着をして、背を後ろへ反らしながら逆さに喜助を見た。額にかかつていた前髪がはさり

と上げられた瞬間、ごろんと地べたに転がっていた。抱えられていた黒猫が、ふぎやあと悲鳴を上げて暴れた。

「ね、かしてくださる」

「なぜ？」

転がったまま、喜助を見ずに夜一は尋ねた。猫を押さえつけるので忙しくて、それどころでは無いよみだった。

「ないしょが、あるのです」

たどたどしくそう言つて、彼は笑つた。薄い青色の目を細くして、懸命に読まれまいとした。そんなことをしなくても、手に持ったままの帽子を被ればいいだけなのだと思付かなかった。

「……かえせよ」

不承不承という様子で、夜一は猫を手の内から放した。

「は？」

そう言つて、彼はようやく自分が手に持った帽子に気が付いた。自身が被るより先に、彼女へ差し出した。

「これ。あついで」

「ひび」

寝転がったまま手を伸ばして取る。彼女はそのまま被ら

ずに顔の上に載せた。

「あの、」

それはそういう風に被るものではない。喜助は一言言いたかった。けれど、どう言え方がいいのか分からなかった。頭の中で言葉がぐるぐる巡っている。言葉の意味は分かっても、それをどう組み立てれば良いのかまだ分からなかった。

「しつておる。かまうな」

鷹揚に泰然と、片手を枕にして、姫君は寝ころんだまま残った片手を振つた。早く行けと彼を追い払うように、その表情を読ませずに、地べたに横になって草と戯れていた。

「……はい」

喜助は胸元に帽子を押し当てて、小さく頭を下げた。その細いすねに黒猫が身体をすりつけて、かすかな声で鳴いていた。

北風の冷たい、けれど夏のような陽射しの日だった。

たった一人で集中する必要があった。最後までやり遂げる自信はあつたが、誰にも邪魔されなくなかつた。不思議に胸の中がごとく鳴っているのが分かつた。自分はこれか

らでもすごいことをする、そんな予感があつた。

足下に絡みつきながら浮くような足取りでついてくる猫は、自分の事をよく知らなかつたのだろう。これから起こることも見えなかつたのだろう。そのことがひどく可笑しくて、喜助は偽物めいた笑みを浮かべて市中をうろついた。

出来れば郊外へ出たかつたが、門番の目をすり抜けるような芸当は難しかつた。やむなく、留守中の山本隊長の屋敷の縁の下へ潜り込んだ。長期の遠征中であと半年以上は誰も任んでいないはずだつた。

そこは戸外ほど風が通らず、蒸した。けれど暑い方が良かった。どれほど時間が掛かるか分からない。夜になって寒くなると、指先が上手く動かないことを喜助は知っていた。無我夢中で木っ端を削つて鳥を作つた時に知つたことだつた。

あの時よりも今度は道具が必要なはずだつた。切つて削るだけではなく、それを元通り継ぎ合わせて縫い合わせるなければならぬ。今手元にある小刀だけでなく、針と糸、それに夜になれば明かりも要るだろう。喉が渴いて腹も空けば手が震えて上手く動かなくなることを知つてい

る。十分に気を遣わなければいけない。

「まて」

手の平で猫の身体を押さえつけてから、喜助は縁の下から這いだした。猫は大人しく待つはずもなく、ずるずると彼の後ろに付き従つた。

諦めて連れて行くかと思つた。だが、いつまた気まぐれを起こして逃げていってしまうか知れない。喜助は逡巡した。

彼は帽子のあご紐を切り取つて猫の首に巻き付けた。太い柱ときつく結ぶ。猫はひどく暴れ、泣き叫んだが、喜助はためらわなかつた。びくと跳ねて大人しくなるまで、きつく締め付けた。

「まて」

念のため、もう一度言い置いて、喜助はそこを後にした。猫の鳴き声は、もう聞こえては来なかつた。

道具袋に、持っているものを全て詰めた。何が必要になるのか分からない。考えられるありとあらゆるものを詰めた。小刀、粗研ぎ用と仕上げ用の砥石、彫刻刀、ノミ、金

槌、接着用の硬化樹脂、型取り用の可塑性樹脂、折りたたみ式ノコギリ、針金切り、ヤットコ、ハサミ、キリ、ネジ、鉄管、紙ヤスリ、ホタルカズラの提灯、酸や灰汁の詰まったビン、消毒薬、包帯、脱脂綿、固形燃料、ロウソク、木綿糸、絹糸、釣り糸、大蜘蛛の糸、庭の木から採取した白い樹液、ビー玉、おはじき、何の変哲もないびかびかした黒い石。まるで夜逃げ人のように自分の財産を全て袋に詰めて、縁の下へ戻った。

猫はぐったりと寝て、動かなかった。暑くてふてくされていふた、と喜助は思った。その方が彼には都合良かった。柱から紐を解いて、動かないままの猫を見据えた。だらりと長い褐色の舌を出したまま、猫はされるがままになっていた。

ずるずると袋と猫を引きずって、縁側の下、入れる限り奥まで喜助は進んでいった。大きく脹らんだ道具袋が無ければ家の中心まで行けただろうが、やむなく部屋一つ分だけ進んで止めた。その上は侍女のための部屋のようだった。

土がわずかにうず高くなっている所へ猫を置いた。すかすかの板敷きの間から明るい日が差して、どこか神々しく猫

部集めて、樹脂で固めた後、紙ヤスリで丹念に磨かなければいけない。元通りにするつもりなら、その太さも長さもびつたりになるよう、前もって測らなければならない。

だから喜助はその細い白い指先で丹念に黒猫の毛皮を撫でていく。どこから刃を入れて裂いていけば内臓まで辿り着けるか、頭の中で緻密に組み立てていく。

猫は、ぶよぶよとして奇怪だった。しなやかに動いて身体を運んでいた四肢は完全に弛緩して、ただの水袋になっただけだ。その水袋がどのような仕組みで組み立てられているのか、彼の興味はそこに移りつつあった。

喜助はそつと小刀を手に取ると、柔らかな腹の下、あばらの終わるあたりに刃を突き立てた。軽く触れるだけでは切れず、意外に力を込めなければならなかった。後で縫うことを考えて、一カ所に穴を開け、ハサミで切ることも考えたが、猫の内臓は意外に奥まっただけで、腹腔の内部を手探りでぐぐっていくしかなかった。

血は思ったより出なかった。むしろべっとり黄色く刃にまみれた脂の方が問題だった。それが切れ味を鈍らせるせいで、余計な力が入り、筋肉や腱まで傷つけてしまい、そう

の横顔を照らし出した。

土はかすかに湿って、かび臭い匂いがしていた。喜助は作業を始めようとして、止めた。一度分解して組み立てるのなら、その間、部品を一つも失くすわけにはいかない、と気付いたのだ。下に敷く布が必要だ。やむなくかぶっていた帽子を脱いで、その上に猫を載せた。小さなその体軀はすっぽりと収まった。

次に道具を並べる。刃物は右、その他は左。いつでも右手は壊す手で、左手は支える手だ。

まず、ゆっくり慎重に毛皮の上から中の構造を押して調べた。猫は肥えていた。拾われたばかりの頃はやせて骨ばかりだったが、今ではわずかに腹の肉が垂れるほどになっていた。

こりこりとした前足股関節の軟骨から脇を撫で、胸骨、肋骨まで丹念にたどっていく。硬い骨に当たれば刃が欠けになってしまうし、万が一骨を断ちきってしまったらと継ぎ合わせなければならない。硬いモノ同士をなめらかに繋げるのは面倒で手間の掛かる作業だ。折れた部分の破片を全

だった。

灰色の骨に囲まれ、しなやかな平滑筋でつながった内臓は手を差し入れれば容易にねじれ、動いた。一体、どの赤い塊の中を探っていけば良いのか、見当も付かなかった。

喜助は強ばった手を休めるために、いったん右手を猫の中から出した。砂利が赤く濡れた柄に着くのを防ぐために、帽子のふちで軽く拭いて右に置いた。緑色の縞の上に血の色が重なる、黒い汚れのように見えた。

喜助は額の汗をぬぐった。一息ついて、水を飲むと思っただ。手が赤黒く汚れていたが、汗で濡れた手の甲はわずかにそれが溶けて赤みが薄くなっていた。何かを口にする前には必ず手を洗えと言われていたがために、その手で水のビンの飲み口に触れるのは憚られた。

その小さな手を着物の裾でぬぐった。どろりと固まりかけた汚れがざらざらした格子縞の着物にこびりついた。そして素早く乾いていく。乾いてただ黒いだけの粉になって土の上に落ちていく。

気を抜いた瞬間に、暑さで頭ががんがんにはじめた。大きく息を吸って、ようやくと鉄の錆びた匂いを感覚として

感じた。視覚と触覚に全神経を集中させていたせいで、他のものを全て切り捨てていたのだった。

喜助はゆっくり両手でビンを支えながら水を飲んだ。冷たかった。特別に冷やしているわけではなくても、水は喜助自身よりも少し冷たかった。

ビンの表面はわずかに水滴で濡れていた。そこへ乾いて固まった血が付いても、ものの血液には戻らないことに気が付いた。わずかに赤みを帯びた水になっても、血の塊は全て溶解するわけではない。ぶよぶよとして、凝ったままにいる。初めて、焦りを感じた。

血は溢れ、乾き、凝る。猫の内側から水気は失われていくが、失われるのは水だけではない。猫は水で出来た革袋だが（少なくとも喜助はそう理解していた）水を補えば元に戻るのだろうか、本当に？ 切った箇所をつなぎ合わせ、水を補い、元通りに縫ってやれば元に戻るはずだろう。そうやって全てのモノを直してきたのだ。これからもずっと、そうやって全てのモノを世界を自分の手の内にあるあらゆるものを直して守っていくのだ。そうしてあらゆるモノは壊れず失われず去らずに留まり続けるだろう、彼の掌で

かった。けれど火を付ければどのようになるのかは、知っていた。それで知っている者が腕を一つ失くした。猫が抱かれている時ならば、姫君の腹がまるごと無くなるだろう。

それは猫の喉から繋がっている肉の管を延々辿っていった先に在った。それだと思っただ箇所はぽこりと不自然に膨れていた。肉の管はぬるりとして細くて再度縫い合わせるのは困難だろうと思われた。だが管を裂くことを厭うては、それは取り除けなかった。けれど喜助はためらわず、小刀を一度握り直すだけで腹積もりをした。

欲しいのは最早、猫ではなかった。猫の中に込められたそれを取り除かなければならなかった。くにゆりと手の内で逃げる管を、食道を親指と人差し指とで押さえ、尖った刃先でゆるりと優しく触れる、まるで餌を与えるように。

筋繊維の間隙に金属が入られたとき、喜助は嬉しかった。確かにそれは嬉しかったのだ。そこからねっとり黄色い胃液でまみれた黒色火薬の包まれた油紙が出てきたとき、喜助は一つ大きな仕事を終えた安堵感で、ほっとため息を吐いたのだ。

小さな手の中で。

そのつもりだった。そうするつもりだった。

闇が少しずつ濃くなっていく。空気の熱はいまだ冷めず、宙へ留まって彼の身体にまとわりついて離れない。それなのに猫の身体がいやにひんやりとして冷たいように喜助には感じられた。ビンの水と同じように喜助の手の中の猫の赤黒い水気は冷え始めていた。

急がなければならないことを、喜助は直感で感じた。

裂いた腹の傷口の端から丹念に指先で触る。ねとりと弛緩した肉の合間にひそんだ護謨のような弾力を持つ軟骨や硬質な骨の隙間にびっちり詰まった神経や腱や血管や、それら全てが喜助の脳裏に靈感と興味を駆り立てたが、喜助は些末なものに頓着することなく、ただ一つのものを探して指先を滑らした。彼を駆り立てたその根元の物を探した。命の源を探しに来たのではない。乾いて失われていく水を求めたのではない。彼は、ただ一つのものを探して、猫に刃を打ち込んだのだ。

やがて彼はそれを見つけた。否、見つけたのだと思った。

彼はそれを何と言うのかは、大人達がそう呼ぶまで知らな

縁の下から、喜助が顔を出したとき、夜一は既に泣き止らした目をして、彼のことを見ていた。

空は既に茜を過ぎ、紫紺に染まっていた。喜助の額に滲んだ汗が風に吹かれて冷えた。それでも尚、水気は乾き切らず滴って、頬について粉となった血をふやかした。彼の頬についた汚れを、少女はその褐色の小さな手で何度も拭いた。擦ってもそれは落ちなかった。

「あの、」

「言うな」

少女はぐろと口元を引き締めた。

「もう、かえってはこないのじやろう？」

喜助は、ゆっくりと首を振った。

「おあいになりますか」

そう言って、帽子に入れたままの猫をゆっくりと自分の後ろから両手で差し出した。

猫は丁寧に縫われていた。裂かれた胃も食道も飛び出した舌も毛皮の下に仕舞われて分からなくなっていた。目は

閉じられていた。安らかな顔をして、猫は眠っているかのようだった。まったくもって、わざとらしいぐらゐの安らかさで猫は眠っているかのようだった。

愛おしげに少女は猫をなぜようとして、少年はそれを妨げた。少女は不満そうに彼を睨み付けた。

「いけません」

喜助はゆるゆると頭かぶりを振り、彼女に背を向けた。夜闇には分からぬ筈だった。毛皮に血の付いていることは。だが、触れられればそのごわごわした手触りで分かってしまうかも知れない。

べつたりと、地面に喜助は座り込んだ。細い脚であぐらをかいて、猫の入った帽子をその上に載せる。隠すように、左手で猫を撫でる。わずかに残った柔らかな所だけを、愛おむむように何度も。

右手ですぐ傍らの草を抜き、爪の間に土をめり込ませながら、地面を掻いた。その場所は柔らかな砂地ではなかったが、喜助には何の痛みも感じられなかった。ただ、やはり右手は壊す手で、左手は支える手なのだと、ぼんやりと思つた。

せて、それでどじろして隠しおさせる。

「言いな」

彼女はそつと彼の口を小さな手で覆おうとする。嘘のような微笑を浮かべた唇は、その掌に隠された。

唇の動きだけで、彼は言った。

直したはずなのに、

どじろして、動かないのでしょ。

深くめり込んだ小石に当たったとき、爪が剥がれるかもしれない、と漠然と思つた。それでも別に構わなかった。接着用樹脂は余っているのだ。それでつけ直せばいい。

その手首を、彼女は握つた。

「よせ」

喜助はぼうつとその黄色みを帯びた目を見あげた。星のように見えた。

「おぬしは、よくやった」

こつくりとうなずいて、夜一は言った。その顔はとても静かで、落ち着いて、微かな痛みを含んでいた。

「しかし、」

元には戻らなかったのです。元には戻せなかったのです。

喜助は、言おうとした。口はただ開くだけだった。曖昧な笑みを浮かべたまま、喜助はゆつくり口を閉じ、そうして、再度、言おうとした。

元通りにしたはずなのに、全部、元の通りに。

声は出ないままで、喜助はまた口を閉じた。肺から鼻腔を通り抜けていくのは血の匂いのする夜風だ。ああ、隠すまでもないことだった。全身からその錆び臭い空気を漂わ